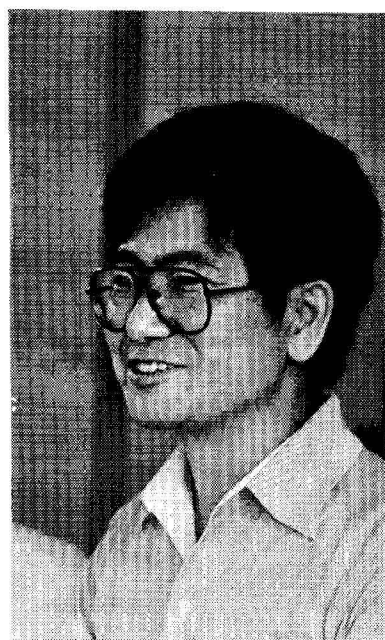


年前、このテ 説書いたことも

所掃除が一番大切な仕事—

「じぎょうだん」・本誌編集長
聞き手 松沢常夫

聞く



編集長が

▽入学をひかえた娘が保育園の友だちから聞いた話をしてくれた。友だちにはお兄ちゃんがいる。

「小学校にいくと、悪いことしたら、立たされたりトイレそうじをさせられたりするんだって」

良いことをしたらごほうび、悪いことをしたらバツというやり方そのものも聞

バツでトイレ掃除とは

この教師は自分でトイレそうじをしてみたい。みんなが気持ちよく使えるようにと心をこめてそうじができるようになるまで。

題だと思いが、なぜバツがトイレそうじなのか。そういうことなら、トイレそうじをしている人は、みんな

「じぎょうだん」新聞(二月一日付・右)に、「バツでトイレ掃除とは」という文章を書いた。「橋のない川」の作家・住井すゑさんに送って、一言いただけないかとお願いしたところ、茨城県牛久市の御自宅で話をうかがう機会が得られた。

「やーい、うんこ屋の息子」と言われて

松沢 ご無沙汰していますが、お元気ですか。

住井 ちょっとカゼをひいて、寝込んでしまっています、お返事、書けなかったんですけど、松沢さんの手紙、いい指摘をされていますね。

学校で、子供が宿題を忘れたり、学校のきまりに反したりすると、罰を受ける。しかもその罰が、便所掃除だ。じゃ、便所掃除する人は、みんな何か人生の罰を受けているのか。こんなやり方は、便所掃除をする人たちに対する差別観を与えるものじゃないか、とんでもない。という指摘ですね。

実は私も、このことをテーマにして三十数年前掌編小説を書いたことがあるんです。それ、探したんですけれど、見つからなくて……。

終戦後、なかなか仕事がない時ですけど、ある子供のお父さんが、たまたま就職したところが、便所の汲み取りの仕事なんですね。お父さんが学校の便所の汲み取りに来る。そのたびにその子は肩身の狭い思いをする。友達に「やーい、うんこ屋の息子」と言われるのでね。

そうしたある日、宿題を忘れた子がいて、その責任をどう取らせるか、先生が子供たちに相談するんです。そしたら子供たちが「先生、それは当然、便所掃除だ」と言うんですね。

「じぎょうだん」88.2月1日号より

「罰で便所
掃除」に思う

30数 マで小 —草とりや便

作家 住井すゑさんに



先生は、戦後の民主教育に目覚めていた人だったものですから、「便所は一番大切なところだ。そういう大事なところの掃除を宿題忘れてくるような無責任な子にやられたらかなわない。これは一番こまかく気がつく、優秀な子の仕事だ」。そう言っ、罰に便所掃除をやらせることに反対するんです。

子供たちも、なるほどと思って、そうだ、便所掃除は大事な仕事だから、むしろ志願して、おれが責任もって便所掃除をやる、というふうに、皆変わっていくんです。それで、便所掃除のお父さんを持った子はホッとするんですね。

ところで、その子供は、とても優れた絵を描く子で、どこかの絵の展覧会に出すことになって、放課後、一人で居残りをして絵を描いていたんです。その姿を便所に汲み取りに来ていたお父さん

が見て、自分がこういう仕事をしているから、息子はいじめられて一人だけ残されているのかな、と心の中で悩みながら家に帰ってくるんです。でも、あとで、展覧会に出す絵を描いていたんだと子供から聞いて、お父さんもホッとする、そういう話なんです。

だから罰で便所掃除をやらせるということの非民主的なやり方を糾弾する小説なんですけど、松沢さんも共通した考え方をされていることがわかって、嬉しかったですね。

**罰で草とり、じゃ百姓
は……と退学させた父**

松沢 事業団がイタリヤ調査に行った時、清掃労働者は一般の労働者より高い賃金だということで、びっくりしたんです。日本では最低賃金ギリギリだというのに。なぜかという、闘いの歴史はもちろん違うのですが、人の嫌がる仕事は高い賃金が当然、という考え方があらしいんですね。
住井 そうですよ。当然ですよ。ものの考え方が全然違いますよね。

私の友人に大工さんがいるんです。その子供が農業高校に入ったのですが、あまり成績がよくなくて、宿題なまけたとか、学科ができないからと、三、四人で草取りさせられたって言うんですね。他の子は普通の授業時間なのに。

それで頭（かしら）が先生に「どうしてか」と聞いたたら、「宿題やってこなかった罰だ」という答なんです。頭はハラを立てましてね。「じゃ、

百姓は生涯、罰を受けるための百姓をするわけか？もしそうなら、それはいったい何の罰だというんだ」というわけで――。百姓の仕事は八割が草取りですからね。それで「そんな教育はなっとくできない」と言ってるので子供を退学させちゃったんです。

便所掃除も同じですね。便所掃除は、まず先生が率先すればいいんですよ。そうすれば、ああ、便所掃除って大事なもんだなって、子供たちはわかります。

松沢 労働の意味っていうのは、やってみないとわからないですね。

住井 自分でやらない人は「文化」ということがわからないですね。文化とは何かといえば、「いのち」を守ることはなんですか。「いのち」にプラスするものが文化財なんです。「いのち」にプラスするものとは「創造」ですね。「いのち」を守るための創造」。

いのち
こゝに
創る



そうすると、誰が一番の文化人ですか。私は、百姓だと思えます。一番下の生産する人、基本的に「いのち」を守っている人、そして労働者、これが文化人ですよ。ところが、今は米を作ると罰をくわされる時代になっちゃったでしょ。「滅反」とかいって、米

を作らなかつたら補助金をやる、米を作ったら罰で補助金を削る、というんですから、まったく不思議な「農政」があるもんですね。

人の心を

深く思いやれる教育を

松沢 今度、娘が小学校に入ったんですけど、びっくりするのは「きまり」が、説明もなしに毎日のように押しつけられてくることなんです。朝八時二十分から三十五分の間に登校しなさい。きまった通学路を通りなさい。二十分で食事をしなさい。学校にしてみれば、それなりの理由はあるんでしょうが、子供を信頼しないで「あれをしてはいけない、これはいけない」ばかりです。

住井 保育園や小学校の時の印象というのは、ある意味では、その子供の一生を支配しますから、いちばん大事なんですけど、例えばせっかくインプットの面白い話を引いても、日本では低次元の道徳観で、「欲張ってはいけません」とか「ウソをついてはいけません」とかの教訓になるんです。魚をくわえた犬が、橋の上から川の中をのぞいたら、川の中にも魚をくわえた犬がいる。「ワン」とほえたら魚が落ちてしまった。私はこの犬の気持を思うと、かわいそうでならなかったんだけど、これを「欲張ってはいけません」と教えるんですよ。

「狼がきた、狼がきた」とウソをついて、本当に狼がきた時、誰も助けにきてくれなくて、喰われてしまったという話も、だから、「ウソをつい

てはいけません」というぐあいになる。

私は、「狼がきた」と言った子は、親がいなくて、その時だけ人がかまってくれたからウソをついたんじゃないか、面白い話だけど、その少年の孤独な思い、深い哀しみを感じたんですがね。

少年にとっては、ウソじゃないんですね。その話から、少年の身の孤独を思いやって、大人は一体どういうことをしているのか、ふりかえらなきゃいけないと思うんです。

それが教科書では、「ウソをついたらいけません」なんて、底の浅い、天皇制教訓的な話になってしまふ。しかし、日本中で一番の大ウソツキは天皇ですからね。「天皇こそウソをつくな」と言いたいんです。

「かわいそうな象の話」って童話がありますけど、あれはいい話ですね。戦争で空襲が激しくなってきたころ、動物園の動物が次々に殺される。象はお腹をすかして、芸をしたら餌をもらえるかと思ってるけれども、それでももらえないで、とうとう餓死する。

天皇がもし人間の心をもっていて、あの話、一つでも、まともにも聞いたら、とても生きていられないと思いますね。自分の宣戦布告のために、多くの生きものにこんなあわれな思いをさせたのか……と。私なら、もがき死にしますね。

それにしても、人が人に罰を加えるなんてことは、いつごろ「発明」されたのでしょうか。人類がこの愚かさからぬけだせるよう、皆さんにもがんばってもらいたいと思いますよ。